

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：32414

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24653199

研究課題名(和文)被災地と非被災地をつなぐ「宇宙俳句・連句療法」の学校プログラムが及ぼす心理的効果

研究課題名(英文)The psychological effects of the "Haiku-Renku School Program": Toward connecting tsunami-stricken area and non-stricken area

研究代表者

黒沢 幸子 (KUROSAWA, Sachiko)

目白大学・人間学部・教授

研究者番号：00327107

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：2011年3月11日から2ヵ月後、津波に被災した宮城県女川町の中学校で行われた宇宙を提出先とした「俳句作り」で、生徒達は「今の気持ち」を五七五に詠んだ。2011年5月・11月に詠まれた句の質的体系化からは、中学生達の当時の心理的様相やその変化が見出された。女川の五七五を受け取った非被災地中学校の生徒達は続きの七七を詠んだ連句(五七五-七七)を女川に返し、女川ではさらに三の句が詠まれた。連句交流を経験した生徒の感想からは、生徒達が地域を越えて互いに心の絆を抱き合っていたことが示唆された。全国と女川とで中学生の震災後心理的成長得点を比較した結果、女川の中学生により強い震災後心理的成長が認められた。

研究成果の概要(英文)：Two months after the tsunami struck the town of Onagawa, Miyagi prefecture, Japan, on March 11, 2011, junior high school students in Onagawa began expressing their feelings via haiku. Their psychological states and changes were visualized via qualitative investigations of their haikus, which were composed in May and November 2011.

In non-stricken areas, Renku School Programs are practiced at some Japanese schools. The renku was made up of three stanzas; Onagawa students made an opening stanza, and the non-stricken area students made and sent the answering stanza back to Onagawa, then Onagawa students completed it by adding the third stanza. Some of written impressions about this were analyzed, and feelings of interpersonal bonds were reported. Points of posttraumatic growth across both student groups, namely all the junior high school of Japan and the students of Onagawa, were compared, and it revealed that the students in Onagawa were experiencing posttraumatic growth more frequently.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

 キーワード：東日本大震災 学校プログラム 中学生 震災後心理支援 俳句・連句療法 表現活動 臨床心理コミ
ユニティ援助 国際宇宙ステーション

1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日、東日本大震災で生じた観測史上最大規模の津波が東北地方沿岸部に押し寄せ、被災した地域の人々は多大な物理的・心的打撃を被ることとなった。被災した子どもの心理支援に関しては、日本各地の臨床心理士等を被災地各校にスクールカウンセラーとして派遣する事業が、国家予算を受けて組織的に展開された。しかし、このような外部から投入される直接的支援は、継続性を担保することが難しい。

通常、震災後心理支援の必要性は、その直後よりも一定の期間を経た後に高まる。未曾有の津波に曝された人々の自律的復興や主体的回復を励ますことがより重要となる長期的支援において、現地の自助を励ます間接的支援は、益々必要性を高めていくと考えられる。

甚大な津波被害を受けた地域のひとつである女川町（宮城県）では町内家屋の7割超が流失・大規模損壊し、町の被災率は8割を超えた。その被災から2ヶ月後（2011年5月）、女川町立A中学校国語科授業では、現地教員（以下、主導教員）の主導のもと、“素直な「今」の気持ち”を五七五に詠む学校プログラム（『俳句・連句作り』）が実践された。

『俳句・連句作り』は日本宇宙フォーラム（JSF）「地球人の心ぶろじょくと」¹から協力を得ており、初回実施日の授業前には、図書室に集められた全校生徒の前でJSF職員が導入の契機ともなった2枚の女川の絵（被災前後各1枚、同校2010年度卒業生による）を紹介した上で、以下のようなことを説明した。

(a) A中学校生徒が詠んだ句（五七五）は地上からも見える星（国際宇宙ステーション（ISS））に提出される、(b)五七五は国内外に発信される、(c)五七五を受け取った国内外の人からお返事（五七五に続く詩（国外）や二の句となる七七（国内））が届けられる。

¹東日本大震災発災前の2011年2月に発足された日本宇宙フォーラム（JSF）による会員制社会教育活動。子ども達の詩・絵・写真等を収集・データ化して収録したDVDを物資等運搬用のロケットに同乗させ、打ち上げ先の国際宇宙ステーション（ISS）で一定期間保管することを主旨とする。

句作りは2日間かけて各学級（各学年2学級で計6学級）の国語科授業内で順次行われた。自身も津波によって実子をうしなった主導教員は、被災前の女川の風景写真十枚弱、先述した2枚の女川の絵を黒板に貼り、そして、「みんなも言いたいことがあるよな。今の気持ちを俳句にしよう」と、生徒に句作りを促していった。

その後、『俳句・連句作り』は、現地主体で約半年ごとに継続実践されている。また、俳句作り以外にも、2011年5月にA中学校3年生が詠んだ俳句（『みあげればがれきの上にこいのぼり（Looking up Koinobori flies Over the debris）』）をNHK国際放送局から海外に発信し（JSFが仲介）、海外からの返詩の意識や、2011年5月・11月に詠んだA中学校生徒の五七五を一の句として国内（東京・京都・九州）の小中学校（連句校）の児童生徒が二の句（七七）

を続けた連句（五七五-七七）を受け取って続きの句（五七五や五七五-七七、五七五-七七-五七五…）をつける活動（学校間連句交流）等、多様な活動が展開されている。

このように『俳句・連句作り』は、句の提出先が“宇宙（＝国際宇宙ステーション）”に位置づけられている点、津波被災地にある学校と非津波被災地にある学校とで連句交流が行われた点で、独創性の高い震災後学校プログラムと考えられる。被災2ヶ月後という比較的早期に実践された震災後表現活動と言える点、現地主体で実践が継続されている点、生徒の句が町全体を励ましていった点（例：町の復興目標への採用）も注目に値する。

表 2011年5月と11月の作品例

2011年5月	『故郷を奪わないでと手を伸ばす』 『黒い波のまれて消える町の色』 『天国と地獄の境はどこですか？』 『ただいまと聞きたい声がきこえない』 『見たことない女川町を受けとめる』
2011年11月	『何故だろう海を見つめて涙あふれる。』 『あの町とこいだ自転車今はない』 『こみあげる無力感が止まらない』 『震災後夢で見た祖母に手をふられ』 『受験生私の夢を届けるために』

2. 研究の目的

東日本大震災2ヶ月後となる2011年5月に津波被災地A中学校で実践された俳句作りを起点とした学校プログラム『俳句・連句作り』の2011年度の展開に注目し、その心理的効果と応用可能性を質・量の2側面から探究することで、長期的な震災後心理支援に示唆を得ることを目的とした。

この目的を遂げるために我々が行った研究は、以下の6つに大別される。

- (1) A中学校生徒が2011年度に詠んだ句を質的に体系化し、津波に被災した中学生の心理的様相や変化を可視化する研究
- (2) 2011年5月の第1回『俳句・連句作り』に参加したA中学校生徒の感想を質的に類型化し、生徒の視座から『俳句・連句作り』の心理学的効果を見出す研究
- (3) 『俳句・連句作り』実施に関するA中学校の主導教員の内的体験をその語りをもとにして記述し、現地教員の視座から『俳句・連句作り』のよさを抽出する研究
- (4) A中学校生徒の五七五を受け取って七七を続けた経験に関する連句校中学生の自由記述感想を類型化し、非津波被災地における『俳句・連句作り』の効果を検討する研究
- (5) 連句を受け取った経験に関するA中学校生徒の自由記述感想を類型化し、学校間連句交流の心理支援効果を検討する研究
- (6) 『俳句・連句作り』参加状況（A中学校・連句校・未実施校）や学年間（中1・中2・中3・高1）で東日本大震災後の心理的成長の差を検証する質問紙調査研究

3. 研究の方法

(1) 体系的かつ独創的なデータ理解を得るために定性的データを統合的に処理する技術(川喜田, 1967, 1986)、KJ法1ラウンドを用いた。KJ法本部・川喜田研究所の認定コンサルタントからKJ法の特徴的手技について指導を受けた経験を持つ研究協力者が質的分析担当者となり、以下のような作業を行った。

体系化を行う素材の最小単位(ラベル)は生徒の俳句作品とし、同類の“訴えかけ(志)”を持つと感じられるラベル同士をセットにしながらかつグループ編成を行う。各グループには、全体感を持ってグループに含まれる素材を捉え得る短文あるいは単語(グループ名)が付与される。質的分析担当者がどうしても“志”を1つに絞り込めない、あるいは、全体の総合性の中に位置づけられないと判断したラベルは、作業過程で素材から除かれる。

最終的なグループ編成の結果を1枚の紙に書き出して空間配置し(図解化)、質的分析担当者と研究代表者とで、同グループにまとめられた素材の“志”の近しさ、グループ間の弁別性、全体の総合的な論理性を客観的視点から確認した。両者で見解が異なった場合は、グループ編成の作業を追跡しながら合意に至るまで協議を行った。図解結果を書き下した叙述文にも同様の確認作業を施した。

(2) 第1回『俳句・連句作り』(2011年5月実施)に参加したA中学校1、2、3年生(当時)に、2012年5月、以下の観点から感想の自由記述を求めた。(a)初めて俳句を詠んだときの気持ち、(b)作文や詩と五七五の違い、(c)提出先が宇宙ときいてどう思ったか、(d)友だちと一緒に教室で詠んでどう思ったか(3年生には(e)句作りの経験が震災後や今に活かされていることも問うた)。この感想を素材とし、1切片が1つの意味を持つように素材から切片を抽出し、意味内容の近しさを基準に切片の類型化を行った。各類型には含まれる切片を表すのにふさわしい分類名を付与した。

(3) 主導教員から『俳句・連句作り』の経験を聴取したヒアリング調査の逐語録から、(a)『俳句・連句作り』導入前後の心情、(b)第1回『俳句・連句作り』を実施した際の生徒の様子、(c)『俳句・連句作り』が現地にもたらした肯定的影響、(d)震災後学校プログラムとしての『俳句・連句作り』の利点、(e)『俳句・連句作り』が長期継続・発展していった理由に言及する語りを抜き出した。(a)(b)をもとに、主導教員の内的体験を時系列に記述した。(c)(d)(e)を素材とし、(2)と同様の手法で切片の類型化を行った。

(4) 連句生徒の感想について、(a)A中学校との連句交流、(b)作品の提出先が宇宙であったこと、(c)学級での七七作りについて、(e)作品を思い出した経験という観点からそれぞれ(2)と同様の切片の類型化を行った。

(5) 連句を受け取った経験に関するA中学校生徒の自由記述感想を(2)同様、類型化した。

(6) 2011年7~11月、全国の中高生に対し、Posttraumatic Growth Inventory (Tedeschi & Calhoun, 1996)を日本語に意識した21項目(0-5の6件法)に回答を求める質問紙調査を実施した。収集されたデータをもとに東日本大震災後のPosttraumatic Growth (PTG)尺度および5下位尺度(〈Relating to Others〉、〈New Possibilities〉等)の得点を算出し、『俳句・連句作り』への参加状況(A中学校・連句校・未実施校)および学年(中1・中2・中3・高1)による得点差を統計的に検討した。

倫理事項² 津波被災地の中学校での実践を端緒とした学校プログラムに着目する本研究では多くの調査が中学生に対して行われる。調査に付随して意図しない個人情報収集される可能性があるため、研究代表者はすべての調査で調査参加者に口頭および文書で調査目的やプライバシーの保護、結果の公開方法等の諸倫理事項を口頭および文書にて十分に説明し、同意を得てからデータ収集を行った。

²我々は、生徒・教員・学校コミュニティを『俳句・連句作り』の主役と考え、生徒の句からうかがわれる心理的様相・変化や教員の取り組みの意義を臨床心理学の専門的見地から積極的に意味づけて現地の相互自助を励ますという、間接的支援者の立場に立って本研究を推進している。

4. 研究成果

(1) A中学校生徒による五七五の質的検討

① B学級生徒 2011年5月の句の検討

2011年5月にA中学校第一学年B学級生徒が詠んだ45句(32名)のうち、2句が作業過程で素材から除かれた。残った43句は7グループ2ラベル(【母なる女川】、【よき日の女川もう一度】、【身にしみる日々あるものへのありがたさ】、【我らに宿る女川魂】、【未来への歩み出し】、【復興をいのり続ける子供達】、【くやしいなどうして皆がこんなめに】)に図解化および叙述化された。

2011年5月当時、町には瓦礫が折り重なっており、食料の供給も十分に安定してはいなかった。B学級生徒が2011年5月に詠んだ句は、過半数が“復興”の語を含むスローガン調の句で、図解にも震災前の女川を取り戻そうと自他を鼓舞する気運が認められたが、この時期のB学級生徒が句に頻用した“復興”の語は、具体的な町の再建ではなく、苦難に耐えながら被災後を生き抜く自他を励ます“象徴的希望”として理解される。それは、一種の心理的拠り所でもあったと考えられた。

② A中学校各学年 2011年5月の句の検討

A中学校で2011年5月に詠まれた句から各学年40句を無作為抽出し、学年別に質的検討を行った。途中、1年生1句、2年生1句、3年生2句が素材から除かれた。

1年生39句は5グループ(【驚愕】、【僕らの女川】、【笑顔で復興】、【未来に】、【時の流れ】)、2年生39句は4グループ(【3.11】、【大切なもの】、【眼前の自然】、【再生】)、3年生38句は4グループ(【奪われたもの】、【よみがえる日々】、【心を寄せて】、【希望の前途】)に図解化・叙述化された。

1年生は、震災前のようなふるさとりを取り戻そうと【笑顔で復興】を呼びかけていた。(1)①でも示唆されたように、“女川”や“復興”の語が頻用されており、それは象徴的希望として理解される。五七五の語調はスローガン等にもよく用いられる。1年生にとって“五七五”は、象徴的希望の持つ力強さをあますことなく表現するのに適していた可能性が考察される。一方2年生の句に“女川”や“復興”の語を含むものはほとんど見られない。脳裏に焼き付けられた【3.11】の衝撃を胸に感じながらもそれを外に表現できずにいる姿や、【眼前の自然】が泰然と移ろうのを感じ取り【再生】に目を向けていく様子が見て取れる。“みんなと一緒に過ごすこと”を【大切なもの】として詠んでいることも特徴的であった。3年生の句からは、津波によって【奪われたもの】に慟哭しながらも【希望の前途】に向かって成長していこうとする人間的強さが感じ取られた。被災を“試練”とするような表現も、3年生のみに見られた。

このように各学年の句に表現されている内容には質的相違が認められ、それによって『俳句・連句作り』が果たした役割や心理的効果も学年によって異なることが示唆された。

③ “海” に類する語を含む

2011年5・11月の句の検討

2011年5月・11月に詠まれた句から、“海”に類する語（「海」、「波」、「湾」、「浜」、「港」、「太平洋」、「魚」）を含む句を選出し、時期ごとに類型化を行った。

2011年5月に詠まれた句のうち27句（全体の9%）が該当し、【豹変した海の脅威】、【町を襲った黒い海】、【津波に負けない】、【割り切れない海への想い】、【それでもきれいな女川の手】、【海と共に再び】、【海へ還る】に類型化された。

2011年11月に詠まれた句で該当したのは23句（全体の6%）で、【海に言いたい】、【今はもう青くきれいな海】、【なぜこの海が】、【豊かな海も一度】、【海からの励まし】に類型化された。

目に映った光景をそのまま描写する被災2ヶ月後の句からは、津波の力に圧倒されている様子がうかがえる。その半年後、青い海に複雑な胸中を訴えかけている。脅威の海は、愛すべき存在でもある。“海”への想いの変化からは、一定の心理的回復も示唆される。

④ “地元地域” を示唆する語を含む

2011年5・11月の句の検討

“地元地域”を示唆する語（「女川」、「故郷」、「町（街）」を含む2011年5・11月の句を、(1)③のように時期ごとに類型化した。

2011年5月に詠まれた句のうち79句（全体の27%）が該当し、【津波に流された女川】、【変わり果てたふるさと】、【にぎわっていたあの町を】、【復興に向けた決意】、【強まる愛郷心】、【新たな未来に向かう希望】、【春めき始めたみんなの女川】に類型化された。

2011年11月に詠まれた句で該当したのは78句（全体の21%）で、【女川復興に向けた結束

と奮起】、【なき女川への服喪追悼】、【まださら地の女川】、【あの日からの歩みと回復】、【移りゆく時節】、【女川に息づく自然】、【育ってきた故郷】、【女川町民として】、【未来への門出】、【この先の未来を女川とともに】に類型化された。

2011年5月の句の大半は“女川の復興”を詠んでいる。一方、2011年11月にはふと目にした素朴な風景が詠まれている。被災2ヶ月後には過去の心象風景として詠まれていた“女川”は、半年を経て“いま自分が住まう町”を意味する語となったと考えられる。しかし、2011年11月の句には、思うようには進まない復興を寂しげに詠むものもある。彼らの心理的回復を捉えるには、より長期的経過に目を向けていく必要があると言える。

⑤ B学級生徒 2011年11月の句の検討

B学級生徒が2011年11月に詠んだ55句（30名）は、4つのグループ（【津波に襲われた】、【変わりゆく女川】、【絆】、【明日へと向かって】、【未来への歩み出し】）に図解化および叙述化された。心的衝撃からの回復と成長や、“互いに深め合う絆”と“会えない者との象徴的絆”の存在、明日に向かう希望の芽生え等、(1)①で同学級の2011年5月の句を体系化した際には見られなかった表現内容の特徴が見出された。

⑥ A中学校各学年 2011年11月の句の検討

A中学校で2011年11月に詠まれた句から各学年40句を無作為抽出し、学年別に質的検討を行った。1年生の40句は4グループ（【津波が襲った】、【今を生きる】、【まもってくれてる】、【ひとりじゃない】）、2年生の40句は5グループ（【浮かんできてる無念】、【あの日から数ヶ月】、【中学校生活】、【感謝を言葉に】、【望みある明日へ】）、3年生の40句は5グループ（【寂寥の市街地】、【時とともに戻りゆく】、【未来を見据える】、【行く先を見ていて欲しい】、【最高学年】）に図解化および叙述化された。

1年生は、【まもってくれてる】存在や【ひとりじゃない】ことから、【今を生きる】ことに支えや励ましを受けていた。2年生は、【あの日から数ヶ月】を経て戻ってきたささやかな安心や笑いを詠んでいた。未曾有の津波被害を経験した自分達の回復・成長を誇り、【未来を見据える】3年生からは、【最高学年】として下級生を牽引していくなかで拓かれたしなやかな成長可能性が見出された。

(2) A中学校生徒の感想の質的検討

当時1年生60名から得た203切片は10個（〔言葉にならない気持ちが表現された〕(27.1%)、〔宇宙に飛ばされるのをすごいと思った〕(23.6%)、〔それぞれに異なる視点が共有できた〕(9.4%)等）、2年生56名から得た171切片は11個（〔未知なる体験への関心と驚きがあった〕(24.0%)、〔みんなの気持ちが知れた〕(18.1%)、〔気負いなしに取り組めた〕(11.7%)等）、3年生9名から得た48切片は8個（〔未来への意志や希望をもたらした〕(23.9%)、〔短い中に気持ちが詠み込められた〕(15.2%)等）に類型化された。

これらから、“宇宙”の観点と地球人同士のつながり感（提出先の新奇性とワクワク感、地球人としての連帯意識）、五七五という表現形式（限られた字数での表現、気負いなく詠める馴染みのリズム）、学校プログラムとしての『俳句・連句作り』（同志としての連帯感、安全に喪失に向き合える場としての国語科授業、作品からのエンパワメント）という、取り組みの特長が考察された。

(3) 実践を主導した教員の語りの質的検討

主導教員の語り(c)(d)(e)からは196切片が抽出され、「生徒達の心をケアする手立てとなった」、「生徒達の“今”を知るツールとなった」、「学校の資源が無理なく活かされた」、「胸を衝く気持ちを吐き出す場となった」、「俳句は個々の被災体験を暴かなかった」、「句作を通して自分自身と向き合えた」、「学校みんなでみんなの俳句を詠んだ」、「色んな詠み手の想いに共感し合えた」、「心にぴったりはまる五七五に辿り着けた」、「現地主体の能動的取り組みだった」、「想いを込めた句がみんなの心を打った」、「生徒達の言葉が町を動かした」にまとめられた。

『俳句・連句作り』導入時の特長（時と場の適切性、学校組織としての意思決定）、現地教育現場にあった課題への応答性（教員が実施できる心のケア活動、生徒の心情理解と速やかな手応え、現地資源の活用と取り組みの継続性）、“五七五”の貢献（制度化された枠組みと安全な言語化、『俳句・連句作り』がもたらす内的体験過程、被災体験の個別性を越えた深い共感）等が見出された。

(4) 連句校にとっての『俳句・連句作り』

① 京都府公立D中学校（当時2年生6学級）

2011年度12月に「七七作り」（「学年道徳」）、同年度冬休みに「連句イラスト作り」（美術科）、同年度12・1月に英語版『俳句・連句作り』（英語科）が実践された。生徒の感想から得た切片は、「女川と心がひとつになった」、「津波に負けない強さを感じた」、「宇宙に打ち上がるなんてすごい」等に類型化された。

② 東京都私立E中学校（当時3年生1学級）

2011年度1月に「七七作り」（国語科）が実践された。生徒の感想から得た切片は、「現地の声に真剣に向き合った」、「被災した中学生の強さや成長を感じた」、「宇宙を介した女川とのつながりを感じる」、「色々な視点から句を味わえた」等に類型化された。

③ 福岡県公立F中学校（当時1・2年生2学級）

2011年度1月に「七七作り」（国語科）が実践された。生徒の感想から得た切片は、「様々な思いを知った」、「女川の悲しみや苦しみが伝わってきた」、「「宇宙」なんてすごい」、「友人の句に感心した」等に類型化された。

A中学校生徒の五七五を一の句とした学校間連句交流は、連句校生徒の共感性を高める取り組みとなった。“宇宙”という提出先の特殊性は、その付加的要素と考えられた。

(5) A中学校生徒にとっての学校間連句交流

A中学校生徒（2011年度1・2年生）の感想から抽出された147切片のうち、142切片が5グループに分類された（「心と心がつながったように思えた」（29.1%）、「嬉しい驚きがあった」（22.5%）、「自分達の気持ちを受け取ってもらえた気がした」（20.5%）、「感謝の気持ちが抱かれた」（13.2%）、「七七に込められた想いを感じた」（11.3%））。

学校間連句交流は、詠み手（読み手）同士に深い共感をもたらす“心の対話”を実現させるものであったことが示唆された。

(6) 東日本大震災後の心理的成長

質問紙調査の結果、A中学校生徒1、2、3年生186名とその卒業生7名、連句校生徒1、2年生212名とその卒業生29名、『俳句・連句作り』を実践していない非津波被災地の中・高等学校（以下、未実施校と略記）2973名（中学生2367名、高校生606名）から有効回答を得た。このデータをもとに、東日本大震災後PTG得点（15項目）、東日本大震災後〈Relating to Others〉得点（4項目）、東日本大震災後〈New Possibilities〉得点（4項目）、東日本大震災後〈Spiritual Change〉得点（2項目）、東日本大震災後〈Personal Strength〉得点（2項目）、東日本大震災後〈Initiative〉得点（3項目）を算出した。

さらに、『俳句・連句作り』への参加状況（A中学校・連句校・未実施校）および学年（中1・中2・中3・高1）を独立変数とした二元配置の分散分析を行い、交互作用が認められた得点については、単純主効果の検定（Bonferroni法、5%水準）を行った。

その結果、A中学校卒業生の東日本大震災後の各PTG得点はすべて、連句校卒業生および未実施校高校生よりも有意に高いことが示された。中学3年生の各得点を見てみると、東日本大震災〈Relating to Others〉得点は連句校および未実施校よりもA中学校で高く、東日本大震災後〈New Possibilities〉得点は未実施校よりもA中学校で高かった。これらのことから、東日本大震災で津波に被災した女川のA中学校生徒（当時）は、非津波被災地の中高生よりも自らの心理的成長をより多く経験していることが示唆された。

連句校に関して統計的有意差が認められたのは、中学2年生の東日本大震災後〈Personal Strength〉得点・〈Initiative〉得点で、前者の得点はA中学校よりも有意に高く、後者の得点は未実施校よりも有意に高かった。A中学校生徒の五七五に触れて自分もめげずに強くあろうと感じたことが、東日本大震災後〈Personal Strength〉得点に反映された可能性がある。東日本大震災後〈Initiative〉得点は、東日本大震災について真剣に考えた機会、つまり『俳句・連句作り』で得た肯定的な自己感覚が得点の高さにつながったかもしれない。しかしいずれも可能性が示唆されたにとどまるため、今後さらなる検討が求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①黒沢幸子・西野明樹、東日本大震災被災後約2ヶ月時点に実践された『俳句・連句作り』の学校プログラムに見られる中学生の心理的様相：KJ法による中1生の俳句作品の質的検討から、目白大学心理学研究、査読有、第9巻、2013、1-12.
- ②黒沢幸子・西野明樹、東日本大震災で津波に遭った2ヶ月後に女川A中学校で実践された『俳句・連句作り』：各学年の俳句と1年後のふりかえりの質的検討、コミュニティ心理学研究、査読有、第17巻第2号、2014、219-238.
- ③黒沢幸子・西野明樹、津波被災から約8ヶ月後にA中学校1年生が学校プログラムで詠んだ俳句の質的検討：初回導入から半年後に行われた第2回『俳句・連句作り』から、目白大学心理学研究、査読有、第10巻、2014、39-53.

〔学会発表〕(計10件)

- ①黒沢幸子・西野明樹、津波被害地域A中学校生徒の俳句作品に見られる“海”への想い：東日本大震災の約2・8ヶ月後に実践された学校プログラムから、日本コミュニティ心理学会第16回大会、口頭発表、2013年7月13日、慶應義塾大学 日吉キャンパス(神奈川)、(大会プログラム・発表論文集、80-81)
- ②黒沢幸子、東日本大震災の被災者支援：子ども支援のその後の展開、日本コミュニティ心理学会第16回大会、自主シンポジウムシンポジスト、2013年7月13日、慶應義塾大学 日吉キャンパス(神奈川)
- ③西野明樹・黒沢幸子、津波に遭ったA中学校生徒が詠むふるさと“女川”と心理的様相の変化：東日本大震災から約2・8ヶ月後の『俳句・連句作り』作品を素材として、日本コミュニティ心理学会第16回大会、口頭発表、2013年7月13日、慶應義塾大学 日吉キャンパス(神奈川)、(大会プログラム・発表論文集、82-83)
- ④西野明樹・黒沢幸子、『俳句・連句作り』に見られる被災地中学生の心理的様相とその変化：津波から約2・8・14ヶ月後に行われた学校プログラムから、日本心理臨床学会第32回秋季大会、大会シンポジウム発表、2013年8月27日、パシフィコ横浜(神奈川)、(大会論文集、121)
- ⑤黒沢幸子・西野明樹、東日本大震災津波被害区域内A中学校での『俳句・連句作り』：グッドプラクティスとなった学校プログラムから学ぶ震災下の心のケア活動、日本心理臨床学会第32回秋季大会、大会シンポジウム発表、2013年8月27日、パシフィコ横浜(神奈川)、(大会論文集、122)

- ⑤西野明樹・黒沢幸子、日本語版自然災害下 Posttraumatic Growth 尺度作成の試み：東日本大震災を経験した関東圏内大学生と被災地中学生への調査から、日本カウンセリング学会第46回大会、ポスター発表、2013年9月1日、東京電機大学 埼玉鳩山キャンパス(埼玉)、(発表論文集、157)
- ⑥黒沢幸子・西野明樹、東日本大震災の被災者支援：子ども支援のその後の展開(パート2)、日本コミュニティ心理学会第17回大会、自主シンポジウム シンポジスト、2014年6月8日、立命館大学 衣笠キャンパス(京都)
- ⑦西野明樹・黒沢幸子、『俳句・連句作り』の学校間交流を通じた中学生による心の支援：津波に被災した中学生の五七五に七七をつなぐ、日本コミュニティ心理学会第17回大会、口頭発表、2014年6月8日、立命館大学 衣笠キャンパス(京都)、(大会プログラム・発表論文集、48-49)
- ⑧黒沢幸子・西野明樹、中学校間連句交流による震災後心理的支援、日本心理臨床学会第33回秋季大会、口頭発表、発表確定、パシフィコ横浜(神奈川)
- ⑨西野明樹・黒沢幸子、津波被災地域の中学校における3年間の『俳句・連句作り』、日本心理臨床学会第33回秋季大会、口頭発表、発表確定、パシフィコ横浜(神奈川)
- ⑩西野明樹・黒沢幸子、津波に遭った中学生が経験した東日本大震災後の Posttraumatic Growth：被災後から『俳句・連句作り』を継続実践してきた女川より、日本カウンセリング学会第47回大会、ポスター発表、発表確定、名古屋大学 東山キャンパス(愛知)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒沢 幸子 (KUROSAWA, Sachiko)
目白大学・人間学部・教授
研究者番号：00327107

(2) 研究協力者

西野 明樹 (NISHINO, Aki)
目白大学・大学院心理学研究科・
博士後期課程・院生